直轄城下町甲府の都市空間

—武家地の分析を通して—

A STUDY ON THE STRUCTURE OF THE SPACE OF KOFU CASTLE CITY
UNDER THE DIRECT CONTROL OF THE TOKUGAWA SHOGUNATE

—Through an analysis of the samurai residential area—

岩本 馨*

Kaoru IWAMOTO

Since 1724, Kofu castle city had been ruled by Tokugawa shogunate vassals named *Kofu-Kinban*. In the beginning, because of its strategic importance, the space of the Kofu city was strongly controlled by Edo government, which was clearly seen in the *banzuke* (numbering) system of the samurai residential area. However, this Edo-centric system was absolutely inconsistent with the local logic of Kofu, and the structure of the city had to be changed gradually. This paper studied this change by analyzing how the *banzuke* system became meaningless.

Keywords: *Kofu Kinban, Kofu Kotte-Kobushin, samurai residential area, numbering system, Chokkatsu-Joka-Machi (Castle city under the direct control of the Tokugawa Shogunate)*

甲府勤番、甲府勝手小普請、武家地、番付、直轄城下町

1. はじめに

近世都市の空間史的研究において、地方都市を対象とした論考はこれまで少なからず蓄積がなされてきた。しかしこうした論考が、三都のような巨大都市を対象としたものにほどに豊富な論点を提示してきたかといえは疑わしいとせざるを得ないのが現状である。その原因を筆者は、それらの多くが類型論の枠組みにとどまっており、巨大都市において提示された論点との一致点・不一致点をケーススタディ的に確認しているに過ぎないからだと考える¹⁾。このような状況を脱却するためには、まず中央対地方という単純な二項対立的な枠組みから離れ、都市相互の関係性の問題として捉え返すという転換が求められているのではないだろうか。

本稿で扱う甲府という都市は、その意味で興味深い対象である。一つには、この都市が享保9(1724)年以来幕府の直轄下におかれたという事実がある。幕府直轄化後の甲府には勤番制が敷かれ、江戸から200名もの武士が集団で移住することになるが、これによって彼らは「甲府藩士」となったわけではなく、身分的にはあくまでも直参の幕臣であることに変わりはない。従って、甲府における武家屋敷は江戸におけるそれと原理的には等価であるはずで、そこ

に江戸の「飛び地」としての位相を認めることができるのである。しかし一方で、直轄都市甲府は同時に、柳澤家の支配から引き継がれた²⁾「城下町甲府」でもあった。甲府の都市空間を支配する論理は必ずしも幕府＝江戸の論理の延長であつたばかりではなく、そこには甲府という都市、或いはそれを中心とする地域自体が有する論理も作用していたはずである。このような二重の論理こそが甲府という都市の特異な位相だったのであり、本稿ではその意味を込めて、直轄化後の甲府を「直轄城下町」という言葉で把握したい³⁾。

本稿では特に武家地の空間に注目することで「直轄城下町」甲府の問題について考察を加えるが、これは都市固有の論理と都市間の関係性の論理との相克を考えることに他ならず、それを通して冒頭での問題提起に対する筆者なりのアプローチを試みたい。

2. 勤番制開始当初の甲府武家屋敷

まずは甲府の直轄化の経緯について『徳川實紀』などの記事を参考に簡単に見ておきたい⁴⁾。それまでの城主であつた柳澤吉里に大和郡山への転封の辞令が下つたのは享保9(1724)年3月11日のことである。これを承けるかたちで同28日に遠江浜松藩主松平豊後守

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo,
M. Eng.

資訓が甲府城の守衛を命じられている。ついで7月4日に小普請組支配であった有馬内膳純珍および興津能登守忠間の両名が甲府勤番支配に任命され、8月11日には甲府勤番支配組頭4名が、同13日にはこの4名を含む200名の勤番士が確定したのである⁵⁾。

甲府勤番の組織は大きく追手組と山手組に二分され、それぞれの組は勤番支配1名と勤番士100名(組頭2名を含む)・与力10騎・同心50名から構成されていた。この成立当初の一員については『甲府勤番日記』⁶⁾ その他の史料により全容を知ることができる。これによると勤番支配は3,000石高・役地1,000石を与えられ、勤番士は100俵10人扶持から500石までの持高でつとめていたことが分かる。勤番士の中からは組頭4名・仮目付10名・破損奉行4名・武具奉行2名・御蔵立合2名などが選出され、それぞれ手当が支給されていた。屋敷については、勤番支配は甲府城郭内に役屋敷(追手・山手1箇所ずつ)を⁷⁾、勤番士も持高に応じた屋敷を拝領することとなった。この際それまでの江戸屋敷については返上を命じられており⁸⁾、彼らの派遣が原則的に無期限であった⁹⁾ことが窺える。

甲府における拝領屋敷の状況については上記『甲府勤番日記』と「甲府城下絵図」¹⁰⁾とを照合することで知ることができる。「甲府城下絵図」は現存する勤番制開始後の最も古い絵図であり、記載人名からすると享保20(1735)年～元文4(1739)年の状況を描いたものと推定される¹¹⁾。さて、これらの史料において最も注目すべき点は、屋敷地一筆ごとに振られている地番の存在である(図2)。これは郭内・郭外(甲府城内堀を境にした区分)の別に通し番号のかたちで振られているもので、以下に示す史料がその発生事情を示唆している(括弧内およびルビ筆者、以下同様)。

- ① 六月十日、為見分両使(竹中主水・酒井監物)・川原清兵衛登城相済、扱家中諸屋敷曲輪の内百四拾八番・曲輪外式百貳拾六番、内外三百七拾五番、其外与力屋敷、是は番付無之相渡す¹²⁾

これは幕末の編纂史料の一部ではあるが、柳澤家から幕府への甲府城引渡しの経緯を記したもので、ここから城とともに武家屋敷の引渡しが行われた際に「番付」が振られたであろうことが推察される¹³⁾。これは引渡しの合理化のための処理であったと考えられ、『甲府勤番日記』の記載から拝領時点での状況を見ても、郭内に拝領した勤番士は110人(149筆中115筆)、郭外は88人(226筆中96筆)¹⁴⁾、不明が2人となっており、原則として引継ぎ前の屋敷地の単位が勤番士への屋敷地の割り当ての単位となっていたことが分かる¹⁵⁾。翌年拝領者は若干変更されたが、その後も番付は原則として与力以上の武家屋敷の表示方法として使用されつづけるのである¹⁶⁾。

しかしこのような地番のシステムは一般の城下町の武家地におい

ては類例のないものである。なぜならそうしたシステムは屋敷地の変動によって容易に破綻をきたしてしまうからだ。にもかかわらず甲府においてそれが可能であったのは、当初の甲府勤番制の有していた特質ゆえに他ならない。ここでは次の2点を指摘しておきたい。

(i) 勤番士人数の恒常性：先述のように設立当初の勤番士数は200名とされており、それは明白な計画性を認めうる数だと言える。その後も天明末年までの65年間に於ける改易以外での転出は僅か6名に過ぎず、また江戸からの新規転入も9名(うち1名は甲府入りせず)にとどまっております¹⁷⁾、ここにも当初のシステムが有していた恒常性への志向を見ることができるだろう。

(ii) 屋敷地の恒常性：甲府への引越し後、翌享保10年7月までに居住条件の悪い屋敷地を拝領した勤番士に対する屋敷替の措置がなされたものの¹⁸⁾、同年11月に出された掟書では「役屋敷之儀者格別、其外向後屋敷替申付間敷候」¹⁹⁾との通達が下されており、原則として以後は屋敷替を禁止する方針となっていたようだ。なお、この掟はその後結局有名無実化するが²⁰⁾、それでも原則論としてこのような規定がなされていたことは注目に値しよう。

このような特質は多分に江戸的な論理の発現であった。幕府の側にとっても、勤番士の側にとっても、甲府勤番はあくまで派遣された「幕府の旗本」であり、建前上彼らの屋敷も「江戸の飛び地」として把握されるものでなければならなかったのである。それは次の史料からも顕著に窺うことができる。

- ② 享保甲辰の秋、勤番の面々江戸に於て、甲陽侍屋敷を拝領仰付らるゝ旨、両支配、番附・坪数書付を以て申渡さる。然る処に引越して見るに、広狭相違し、家作破壊なる処あり。是分は翌年願奉りて、屋敷替仰付らるゝ²¹⁾

ここで注目されるのは屋敷地の拝領が江戸において行われ、しかもそれが甲府の屋敷地の実情とは無関係に行われた、という点である。まさに番付とは江戸の視点からの機械的な屋敷配分の象徴に他ならなかったのである²²⁾。

では、このような空間のあり方は甲府勤番の当初の設立意図とどう関連していたのだろうか。村上直氏が指摘しているように、「主として甲府城を守護し、城米および弓矢鉄砲などの武具を準備し、府中の政務をおこなうこと」²³⁾が甲府勤番の第一の目的であったことは言うまでもない。それは「天領拡充と幕府権力の浸透をはかる幕府政治の方向を顕著に示した政策」²⁴⁾の表れであったのである。しかし甲府勤番は必ずしもそのような積極的な意味合いのみを有していたのではなく、一方では寺田登氏が指摘するように、寄合・小普請対策としての側面もあった²⁵⁾こともまた否定できない。すなわち、

左：[図1] 甲府城下町図(「甲府城下絵図」(坂田家文書)をトレース、括弧内は筆者加筆)
上左：[図2] 「甲府城下絵図」(坂田家文書)部分(図1の枠内)
上中：[図3] 「甲府絵図」(志村守明写、若尾資料)部分(同上)
上右：[図4] 「懷賢甲府絵図」(第一版、甲州文庫)部分(同上)

享保期のあたりから、多数化する非職の幕臣団をいかに管理していくかということが幕政上の大きな課題として浮上してきており²⁶⁾、甲府勤番は彼ら冗員の活用先としても意図されていたというのである。実際、平澤勘蔵氏の分析によれば、勤番士となった小普請200名のうちそれまで役職の経験が皆無であったものが159名を占めていたといい²⁷⁾、その意味で甲府勤番の設置は、幕府側にとっては冗員の整理、小普請の側にとっては役職への登用という、両者の思惑を合致させる政策だったと言えるのである。

このように甲府勤番の設置は幕府の天領政策のもつ2つの側面、すなわち全国支配を更に強化しようとする積極的側面と、幕政の諸矛盾を処理するために利用しようとする消極的側面の双方を浮かび上がらせるものであった。甲府という場所の論理を考慮せずに機械的な番号で屋敷地を割り付けていくという方法は、まさにそのような幕府＝江戸の論理による勤番士の「植え付け」の表れにほかならなかったのである。

3. 甲府勝手小普請制と武家屋敷

「甲府城下絵図」以降の甲府を描いた絵図で次に古いものとして挙げられるのは若尾資料の志村守明写「甲府絵図」である。これには「弘化二乙巳五月吉辰写之」との記載があり、原図は記載事項から判断して寛政7(1795)～享和元(1801)年のものと推定されるが²⁸⁾、この絵図の特徴的な点は、ただ番付のみが情報として記されているという点である(図3)。人名はここでは省略されているが、逆に言えばそれは当初の番付と拝領者との1対1の対応関係がこの時点でもなお全体的に見て有効性を失っていなかったことを示すものと考えられよう。

しかし一方で、制度面においても空間面においても当初のシステムに変容の兆しが現れはじめてのもこの頃からであった。中でも大きな出来事と考えられるのが寛政元(1789)年の甲府勝手小普請の新設であろう。これは寛政改革の一政策で、いわば「甲府詰の小普請組」²⁹⁾として新設されたもので、管見の限りでは同年9月27日に小普請組酒井因幡守支配の森川市右衛門に発令されたのが初例である³⁰⁾。そしてこれを皮切りに寛政期だけでも33名、その後も不断に派遣が続くことになる。その性格は通常、不良幕臣の事実上の配流として理解されており、またその理解は誤りとは言えないが、ただその側面のみに目を奪われてしまうと本質を見失うことになる。すなわち、江戸からの転入者が増加している一方で、この寛政期には甲府からの転出も盛んに行われているのである。特に寛政2年9月の駿府勤番制開始時には甲府から20名の勤番士が転出している

し³¹⁾、また江戸への転出者も寛政期だけで19名を数えている³²⁾。つまり当時の旗本植崎九八郎が「甲州勤番の儀、只今迄不行跡の者を被遣、其子孫に至り行状よき者をハ間々御当地へ被召帰候」³³⁾と述べているように、甲府勝手小普請の流入は「行状よき」勤番士の江戸転出と裏表であったのである。また、甲府入りした小普請にしても、御目見以上であればその後の勤番士への昇格³⁴⁾、また御目見以下でも行状次第では江戸への転任の道は開かれていた³⁵⁾のであり、従ってこの甲府勝手小普請の創設は、一方的な配流というよりも綱紀肅正を意図した幕臣団の流動化策と理解したほうが正確であろう。

綱紀肅正という点では江戸の側も甲府の側も利害が一致するが、特に後者にとっては、勤番士の士気低下は甲府勤番制そのものの基盤をゆるがしかねず、勤番士の流動化はそのためにも避けられない道であったと考えられる。しかし逆説的ではあるが、このことこそが先に述べた勤番制当初の空間的な規定性を変容させていく最大の要因となるのである。

一例として図5に示した「郭外代官町屋敷割図」を検討しよう。これは番付で言えば郭外168番から171番までの4筆の状況を描いたもので、上段にそれぞれの間口と裏行、坪数が記されている。ところが下段を見ると、黒で描かれた番付の区劃とは別に、朱書により屋敷拝領の状況が描かれていることに気付く。これを読み取って情報を整理したものが図6である。ここには5名の拝領者が記されているが、彼らはともに寛政5(1793)年3月に勝手小普請を命じられて甲府入りした伊賀同心で、禄高は塩沢・柚原木・富田が30俵2人扶持、磯崎・鈴木が30俵3人扶持と、ほぼフラットであった³⁶⁾。ここで最も注目されることは、彼ら5名の屋敷拝領の単位が番付の区劃とはほとんど無関係であるという点である。このことは甲府勤番制開始当初と甲府勝手小普請制開始時期の屋敷拝領状況の差を端的に示しているように思われる。つまりそれは、全てが明屋敷となったところに屋敷を割り付けていける状況と、その時点で明いている屋敷地のみで割付を行わなければならない状況との差異である。高相応の屋敷を供給するという大前提のもとでは番付区劃の原則は二義的とならざるを得ず、こうして当初の番付にもとづく空間の秩序にも次第に綻びが生じてくるのである。

4. 空間秩序の変容

では、19世紀以降の変容について見ていくことにしよう。使用する史料は甲州文庫所蔵の「懷寶甲府絵図」である。これは甲府において広く頒布を目的として出版された唯一の木版図で、「嘉永二年己酉七月上梓 甲府魚町四丁目擁萬堂村田屋孝太郎誌」と記されてい

左: [図5] 郭外代官町屋敷割図 (寛政5(1793)年、赤岡重樹旧蔵資料、山梨県立図書館所蔵)

中: [図6] 郭外168番～171番における屋敷地配分図 (図5をもとに作成、グレー部分が原図朱書の記載にかかわるもの)

右: [図7] (参考)「甲府郭内外番附屋敷仮絵図帳」(天保期か。赤岡重樹旧蔵資料、山梨県立図書館所蔵)における168～171番

る。但しこれには初版と二版の二種類があり、記載人名を検討すると後者は実際には慶應元(1865)年以降の甲府を描いたものであることが分かり、この点注意を要する³⁷⁾。本稿では初版を主として用いる(以下「懷寶初版」と呼ぶ)。

さて、絵図の記載について最初に気付く点は、武家屋敷の表記において番付が姿を消しているということである。のみならず、屋敷地の区劃も当初のものと大きく異なるものとなっている(図4参照)。そこで「甲官便覧」³⁸⁾などの史料も参照しつつ、絵図に記載されている人名を検討すると、大きく次の2点を指摘することができる。

a) 郭外から郭内への移動

一つは、当初からの勤番士の郭外から郭内への移動である。「甲府城下絵図」以降「懷寶初版」に至るまでの武家屋敷の動向については、志村守明写「甲府絵図」のほか、「文化十一年甲府城職員名鑑」³⁹⁾、「甲府郭内外番附屋敷仮絵図帳」(以下「仮絵図帳」とする)⁴⁰⁾、弘化2年「甲官便覧」などによりある程度の追跡が可能である。これらをもとに旧郭外居住者の郭内への移動状況についてまとめたのが表1である。これは逆に郭内から郭外へと移動した事例(6例)の5倍以上にあたり、郭内への求心的移動の傾向は顕著と言える。このような移動は、早い事例では享保・寛延期に既に見られるものの、大半は寛政期以降においてであり、そこには先述したような勤番士の流動化が関わっていると考えられる。実際、江戸或いは駿府への転任によって明屋敷が発生したところに郭外から勤番士が移転した事例は表1においても多く確認できる。

更に注目すべき点は、移転前と移転後の屋敷が多くの場合合同規模で、中には全く同じ坪数である事例も見られるという点である。例えば(ソ)の桜井は当初郭外佐渡町218番屋敷(442坪)を拝領していたが、その後大橋万吉の駿府転任(寛政2年)に伴い明いた屋敷(郭内先手小路71番)に移ることになるが、この屋敷は489坪(『甲府勤

番日記』では484坪)の規模があったにもかかわらず、桜井が拝領したのはこのうちの442坪で、残り41坪は名目上借地としているのである⁴¹⁾。ここには高坪制の逆説がある。すなわち、先述したような勤番士の「植え付け」としての視点からすれば、屋敷地の配分は高坪制の適用(家禄高に応じた規模の屋敷を与えること)こそが第一義であった。従ってこの価値体系においては郭外442坪の屋敷も郭内442坪の屋敷も同格ということになり、逆にそのことが、郭外居住の勤番士が「同格」の(一方で甲府という場所の論理においては格の高い⁴²⁾)郭内屋敷に移動することの正当性を与えることになってしまうのである⁴³⁾。甲府の場所性を無視した原則が却って甲府における同心円的なヒエラルキーを浮き彫りにする。表1に示した勤番士の移動はその顕著な例だと言えるだろう。

b) 屋敷地の細分化

二点目として挙げられるのは屋敷地の細分化である。甲府に流入する勝手小普請の増加は、特に規模の大きい屋敷地の細分化をもたらしした。例えば郭内追手小路11番屋敷は2,501坪の規模を有したものの長らく明屋敷であったが、「懷寶初版」を見ると5分割されている。そこで記載人名を子細に検討すると、4名が天保12(1841)年から14年にかけて勝手小普請として甲府入りした武士であったことが分かり、この時期に細分化がなされたと推察される。また、「懷寶初版」では12筆に分割されている郭内森下小路46番屋敷は本来全体4,092坪で一筆であり、こども長らく明屋敷であったが、天保期あたりから細分化が始まったようである。「仮絵図帳」には46番を描いた図が2種類あるが、このうち天保4年以降に描かれたとみられる図には3名、天保12年以降と見られる図には7名が見られ、この敷地が新規勝手小普請への屋敷地として供されたことが窺えよう。

上に挙げた例に限らず、甲府の武家屋敷の細分化にとって天保期は一つの劃期であった。特に天保改革期にあたる天保12年5月から

[表1] 旧郭外居住者の郭内への移動(享保10年8月以降)

記号	初代勤番名	郭外時代の屋敷	郭内移転先	移転時期	移転先の前拝領者	「懷寶初版」	備考
イ	小笠原伊左衛門	166番322坪	中殿町18番	享保19年	深谷左源太・享保19年転任	土手小路	組頭就任により引替
ロ	佐々木数馬	144番384坪	橋小路61番うち384坪	寛延4年	原田藤十郎・享保20年転任		明和8年遠島
ハ	鈴木八十郎	2番750坪	橋小路56番527坪	延享4年	小倉安右衛門・相對替	土手小路	組頭就任により相對替
ニ	川辺四郎左衛門	222番400坪	厩跡315坪	宝暦4年以前	不明		のち橋小路、天保9年転任
ホ	佐久間五郎右衛門	26・27番	厩跡315坪	宝暦4年	川辺吉右衛門・先手小路へ		天保以前に転任か
ヘ	中村宇之助	24・25番	先手小路79番うち340坪	宝暦6年	明屋敷	先手小路	ほか借地
ト	野田一学	220番	裏先手小路121番310坪	宝暦6年	大久保内蔵助・享保19年転任	同左	
チ	恒岡南八郎	157番352坪	新先手小路138番	宝暦13年	明屋敷	裏先手小路	
リ	福井七郎右衛門	119番348坪	中殿町	寛政～文化か	不明		文化6年転任
ヌ	森長四郎	154番330坪	山田町門前	寛政～文化か	不明		天保以前に転任か
ル	斎田伝八郎	153番330坪	先手小路	寛政～文化	不明	中殿町	
ヲ	小幡数馬	77番507坪	中殿町26番507坪	寛政～文化	諏訪吉之丞・寛政2年転任	厩跡	
ワ	宇佐美春沢	117番348(368?)坪	先手小路80番252坪+81番うち116坪	寛政～文化	滝野元長・寛政9年転任	同左	ほか借地
カ	榎原兵吉	137番337坪	桜小路58番うち300坪か	寛政～文化	依田源太郎・享保20年追放	同左	
コ	庵原勘右衛門	147番330坪	森下小路52番うち330坪	寛政～文化	小栗庄右衛門・寛政2年転任	同左	ほか借地
ク	芦屋伝右衛門	197・198番360坪	先手小路98番362坪	寛政～文化	明屋敷か	同左	
ケ	佐々木庄助	56番360坪	厩跡	寛政～文化	明屋敷	厩跡	
ソ	桜井宇之助	218番442坪	先手小路71番うち442坪	寛政～文化	大橋万吉・寛政2年転任		ほか借地、天保9年転任
ツ	佐々木隼人	159番396坪	厩跡	寛政～文化	明屋敷		天保9年転任
ネ	中村甚左衛門	179番567坪	土手小路36番560坪	寛政～文化	松平金蔵・寛政2年転任		天保期転任か
ナ	山田四郎五郎	1番380坪	先手小路76番うち380坪	寛政～文化	野田源五郎・寛政8年転任		
ラ	湯川百助	125番495坪	土手小路29番うち400坪	享和か	大河内・中殿町へ		嘉永2年転任
ム	本間伝左衛門	206番321坪	先手小路91番510坪	文化頃	中村・中殿町へ?	同左	ほか借地、弘化2年転任
ウ	芥川弥三郎	17番300坪	裏先手小路114番297坪	文化～天保	石川五郎右衛門・寛政11年転任	先手小路	
エ	伴孫太郎	18番306坪	桜小路63番560坪	文化～天保	山本与次左衛門・相對替	同左	組頭就任により相對替か
ノ	根岸市十郎	19番300坪	土手小路33番うち330坪	文化～天保	杉浦・郭内14番へ	同左	
オ	朝比奈新之丞	21番300坪	新先手小路144番うち288坪	文化～天保	浅羽文右衛門・寛政2年転任	裏先手小路	
ク	矢部嘉七郎	145番330坪	中殿町16番	文化～天保	小川数馬・寛延2年屋敷引弘	同左	
ヤ	今村左原太	106・108番430坪	森下小路46番うち470坪	文化～天保	明屋敷	記載なし	両「便覧」では先手小路
マ	東儀弥十郎	110番399坪	土手小路31番うち400坪	文化～天保	戸田清九郎・寛政2年転任	記載なし	両「便覧」では橋小路
ケ	本多源八郎	188番390坪	土手小路38番	天保頃	佐々井金十郎借地	同左	
フ	葉山三十郎	211番316坪	中殿町	天保～弘化	不明	記載なし	
コ	玉虫佐兵衛	納戸小路	土手小路35番	弘化～嘉永	柴田・追手小路へ?	同左	
エ	権太半蔵	204番380坪	土手小路39番	嘉永	上田弾正借地・嘉永2年転任	同左	

同14年閏9月にかけてのおよそ2年半には実に64名(うち御目見以上52名)にものぼる幕臣が勝手小普請として甲府に送られたのであって、このことが屋敷地の細分化を急激に進める大きな要因となったものと思われる。結果、屋敷地の単位をものはやしきなくなった「番付」は実質的に意味を喪失していくことになる。

ここで注意すべきは、この天保改革期の勝手小普請の流入と寛政期のそれとの最大の相違点、すなわちこの期間の江戸転任者がわずか1名に過ぎなかったという点である。このことは甲府が江戸にとって「不良」幕臣の厄介払いの対象としか見なされなくなっている証拠に他ならず、従って「番付」の無意味化とは、屋敷地の細分化がもたらしたのみならず、幕府が甲府の武家屋敷を合理的に把握するということがそのものが無意味化したことともパラレルであったと言えるのではないか。そして、これと表裏一体のかたちで浮かび上がってくるのは甲府自身の有する論理、すなわち先述したような武家屋敷のヒエラルキーを伴う場所の論理であり、それは時に「拝領」の枠すらつき崩していくことになる。事例としてここでは『萬代日記』の享和3(1803)年の記事に以下のようなくだりがあることに注目したい。

③ 一、四月八日夜、大手東湯川百助殿長屋やけ申候。

一、同十一日昼八ッ時、同所鈴木鉄吉殿長屋やけ申候。

是は大河内彦十郎殿表向名前之由二候。(後略)⁴⁴⁾

ここでいう大河内彦十郎とは享保9年に郭内土手小路(大手東小路)29番屋敷を拝領した大河内十太夫の子孫である。ところが「仮絵図帳」では29番に湯川林之助(ほかに曲淵団助借地)、30番に鈴木八郎右衛門の名前が見え、大河内は郭内17番に移っていることが分かる。この17番屋敷を拝領していた藤沢孫左衛門、30番屋敷を拝領していた間宮十左衛門はともに享和元年に転任となっており、移動はその後まもなく行なわれたと考えられるが、ここで注目すべきなのは上掲史料の「是は大河内彦十郎殿表向名前」という表現である。これは屋敷地において名義の保持者と実際の居住者とは相違する場合があったことを示すに他ならず、ここでは大河内と鈴木⁴⁵⁾との間に屋敷の賃貸関係が成立していたことが窺えよう。実際、「仮絵図帳」には拝領地と空間的に離れた(つまり居屋敷の拡大目的とは考えにくい)「借地」の記載が散見され、これも拝領地以外への居住の広まりを予感させる。ここに見られる勤番士の動きはもはや江戸=幕府による屋敷地統制とは異なる、まさに甲府という都市自身のもつ文脈に応じたものであったと言えるのではないか。

5. 結びにかえて

以上、直轄化後の甲府における武家屋敷の空間秩序を、「番付」に着目して考察してきた。しかし、そこで見てきたような「直轄都市」としての論理に対する城下町甲府自身の論理の擡頭は、必ずしも本稿で述べてきたような武家の居住の問題に限られたことではなかった。以下ではこの問題について、町方との関係をも視野に入れつつ考察し、結びにかえたい。

先述したように、直轄都市甲府は幕府の天領支配の強化および非職の幕臣団対策という2点を目的としたもので、何よりもまず幕府のために存在したものであった。そこでは都市の支配層に求められるはずの、都市民の保護者としての役割はあくまで二義的なものに過ぎず、安藤正人氏が指摘するように、直轄化後の都市政策は「都

市維持のための諸負担を町方により多く転嫁する方向」⁴⁶⁾へと進んでいくのである。このことは町方人口においても如実にあらわれており、柳澤時代の享保5(1720)年における13,621人が19世紀初頭には1万人を割るまでに落ち込むこととなる⁴⁷⁾。

武家屋敷のあり方でも見たように、甲府という都市自身の論理を無視したまま都市を運営していくことは現実には不可能であった。それゆえ甲府における都市政策も何らかの方向転換を余儀なくされたはずだが、ここではその一端を徴典館という教育施設を事例として窺ってみたい。

徴典館は寛政7(1795)~10年頃に当時の甲府勤番支配が勝手小普請富田富五郎の学才を評価し、役屋敷に仮の学問所を開いたことに端を発し⁴⁸⁾、文化元(1804)年には校舎が新築され⁴⁹⁾、更に天保14(1843)年には規模を拡大して江戸より教授が派遣されることとなった⁵⁰⁾。これは旧門弟の内山勲が称しているように、駿府の明新館とともに江戸昌平黌の「支校」としての性格をもつ施設であったようだ⁵¹⁾。ただ、『甲斐廻手振』における「天保十三寅年、酒井房州・浅野中務鎮台の頃、駿府御目付戸田寛十郎と相謀りて官へ告し、諸事御改革の折柄に付猶又学校再建の義被申」⁵²⁾との記述は、これら一連の動きがむしろ甲府側から推進されたものであることを示唆している。ここには直轄都市の論理の転換がある。つまり、本来直轄都市とは他ならず江戸幕府のために存在するはずのものであったのが、ここでは「甲府の武士」の教育のために直轄都市としての立場が逆に利用されているのである。

更に町方に目を転じれば、この徴典館が「農・工・商中有志者」に対しても開放されていたこと⁵³⁾、またこの施設が医学所も併設しており、甲府の都市民に対する医療行為も行なっていたこと⁵⁴⁾も注目される。これは一面では「知」の独占とその分与を通じた民衆支配とも解せるが、しかしそれ以上に、ここで提供された教育・医療によって甲府の都市民が広く恩恵を受けたであろうことは否定できない。このことは、甲府の都市政策が、都市維持のための諸負担をできるだけ町方の側に転嫁するような、当初の意味での「直轄都市の論理」とは明らかに異なる方向性をとりはじめていたことの証しと言えるのではないだろうか。

武家地の例、また徴典館の例で見たように、19世紀以降の江戸と甲府の関係は、直轄化当初のような「中央政府による地方支配」という単純な図式では解けない。そこでは幕府の論理のみならず、甲府在住の武士、或いは町方など、複数の集団の論理が、時には互いの論理を逆に利用しながら複雑に絡み合っているのである。本稿における考察は、その関係性を空間の面から解きほぐすための一つの試みである。

註

- 1) 例えば甲府の都市空間についての先行研究には飯沼賢司「戦国期の都市“甲府”」(『甲府市史研究』第2号、1985年11月)、中沢信吉「甲斐府中概観—飯沼論文批評—」(同第3号、1986年11月)、数野雅彦「戦国期城下町甲府の景観復元」(『山梨の考古学論集』Ⅲ、1989年)、伊藤裕久「近世甲府城下町の空間形成—中近世移行期の都市空間の変容—」(『甲斐中世史と仏教美術』、名著出版、1994年、のち伊藤『近世都市空間の原景』、中央公論美術出版、2003年に再録)などがあるが、その手法は既往研究の枠に甲府を適用したに過ぎない(数野氏による飯沼論文批判)か、またそうでなくとも結局は甲府という個別事例として都市の形成史を語るところにとどまっているように思われる。

- 2) 直轄化以前の甲府は城主の交替が頻繁であった。すなわち、慶長8(1603)～12年が徳川義直、元和2(1616)年までが城番制、寛永9(1632)年までが徳川忠長、寛文元(1661)年までが城番制、宝永元(1704)年までが甲府徳川家、そして享保9(1724)年までが柳澤家である。もっとも、城主として実際に甲府入りしたのは最後の甲府城主、柳澤吉里のみであった。
- 3) ここで言う「直轄城下町」とは、①城郭が直轄化後も都市の軍事的・政治的中心施設として機能していること、②町方支配の組織が独自におかれていること、を条件として想定している。大坂や駿府などもこれに相当すると思われるが、今後の課題である。
- 4) 『徳川實紀』第8篇(『改訂増補国史大系』第45巻、吉川弘文館、1933年)、関連頁はpp.330-331、p.341、p.345。
- 5) なお、甲斐国天領のうち村方については代官支配のもとにおかれたため、甲府勤番は甲府城の防衛と甲府町方の民政を専ら担当することとなった。
- 6) 江戸東京博物館所蔵甲府勤番別所文書、『山梨県史』史料編8 近世1領主(山梨県、1998年)所収。旧甲府勤番の別所家に伝来する享保9(1724)年～安永9(1780)年までの甲府勤番に関する記録である。ここに設立当初の甲府勤番全員のリストが収録されている。石高のみならず屋敷地、その後の動向についても記載され、情報量は豊富である。類似史料として『裏見寒話』(『甲斐叢書』第6巻、第一書房、1974年 所収)、「甲府在番総人数高附帳」(斎藤典男「成立期甲府勤番士の知行高について」、『甲斐史学』第22号、1967年7月)において翻刻)などがあり照合可能。
- 7) 前掲『裏見寒話』に「右御役屋敷、最初は拝領屋敷と成て、曲淵野州・有馬羽州の如き、江戸表の拝領地差上罷越、御役替御免にて帰府の節、空地に材木等被下事なし、然るに宮崎若狭守、当役を蒙り願候に付、夫より已来御役屋敷と成る」(p.32)とある。
- 8) 例えば『甲府勤番日記』にも「出羽守・能登守支配之者屋敷之儀、彼地城下屋敷高相応二家作共二可被下候。但当地之屋敷者家作共二可差上候」(p.973)と見える。
- 9) 但し甲府勤番支配は例外で、一般に数年の任期で江戸に転任している。
- 10) 坂田家文書、『甲府市史』史料編第2巻 近世1(甲府市、1987年)所収。
- 11) 享保20年に追放となった勤番士6名の屋敷地が「明地」とされていること、また甲府代官所の人名が山田治右衛門(享保19～元文4年在職)となっていることから判断した。
- 12) 『甲府御城付』(『甲府市史』史料編第2巻 近世1 所収)、p.229。これは安政6(1859)年以降)編纂の甲府城関連の記録集である。勤番支配をはじめとする要職者の一覧、また勤番士・勝手小普請の異動の記録など、甲府における武士の状況を知る上で欠かせない史料と言える。
- 13) これは『裏見寒話』における「甲府士屋敷軒数 御郭内百四拾九軒 御郭外式百式拾五軒」(p.21)という記載とも対応するものと考えられる。
- 14) ほか番付をもつ与力屋敷19筆(あと1騎分は不明)が郭外に確認できる。
- 15) なお、この際発生した明屋敷については享保10年に払下げが行われている(山梨県立図書館所蔵「御用留帳」)。
- 16) まれに番付のない屋敷地も存在したが、絵図などでは「番外」として見える。なお、同心以下の居住する組屋敷には番付はふられていない。
- 17) 前掲『甲府御城付』による。
- 18) 前掲『甲府勤番日記』享保10年の記事に「今年郭外拝領屋敷、場所・家作悪敷住居難儀面々願替申上、七月御引替済」(p.1017)とある。
- 19) 『甲陽柳秘録』(『甲斐叢書』第3巻、第一書房、1974年 所収)、p.36。
- 20) 例えば前掲『甲府勤番日記』を見ても、早くも寛延4(1751)年に佐々木孫市が屋敷替を行っている旨の記載が見える (p.981)。
- 21) 前掲『裏見寒話』、p.26。
- 22) このことは番付の割付方法にも顕著に表れている。すなわち、郭内・郭外とも、通りに沿って番号が順々にふられたものに過ぎず、城との距離あるいは屋敷規模との相関は全く見出せないと言ってよい。
- 23) 村上直「甲府勤番支配の成立」(『甲斐史学』特集号、1965年10月)、p.131。
- 24) 同上、p.129。
- 25) 寺田登「幕政改革と寄合・小普請対策について」(『国史談話会雑誌』第23号、1982年2月)。
- 26) 実際、徳川吉宗の將軍就任時にも200名を超える紀州藩士が幕臣化していたのであり、筆者がかつて指摘したように、甲府勤番設置による明屋敷の発生が彼ら新規幕臣への屋敷地配分に貢献したことも併せて考えると興味深い。拙稿「紀州藩士の幕臣化に伴う江戸屋敷獲得動向」(『日本建築学会計画系論文集』第561号、2002年11月)参照。
- 27) 平澤勘蔵「甲府勤番支配の成立に関する一考察ー主として勤番士の履歴・系譜を中心にー」(『法政史学』第28号、1976年3月)。
- 28) 判断材料としては追手門前に「聖堂」が描かれていること(寛政7～10年頃設立の学問所に関係か)、また後に薬園がつくられる敷地がまだ勤番士居住地(牧野氏の宅地、享和元年に江戸転任)となっていることが挙げられる。なおこの点はこれまで論点として提示されていない。
- 29) 寺田登「甲府勝手小普請について」(『国史談話会雑誌』第19号、1978年3月)、p.26。
- 30) 前掲『甲府御城付』、p.316。なお同『甲府市史』では「安政元酉年」と記載されているが、これは翻刻の誤りで寛政元年が正しい。
- 31) その成立の経緯については寺田登「駿府勤番について」(『地方史静岡』第8号、1978年11月)を参照のこと。
- 32) 前掲『甲府御城付』による。
- 33) 「植崎九郎上書写」(享和元年、『甲府市史』史料編第3巻 近世Ⅱ、pp.111-118)。
- 34) 例えば寛政期に甲府勝手小普請入りした33名のうち御目見以上は10名であったが、うちその後の動向不明の1名を除く全員が遅くとも弘化2年までに勤番入りを果たしていることが確認される。弘化2年「甲官便覧」(頼生文庫、山梨県立図書館所蔵)参照。
- 35) 幕末期のものではあるが、「甲府勝手小普請江戸表御奉公之儀二付奉願候書付」(慶應3年、内閣文庫所蔵江戸城多聞櫓文書)などの史料からは、行状のよい勝手小普請が甲府勤番支配により江戸帰還の推薦対象となっていたことが窺える。この史料で推薦されている内山安之丞は僅か高15俵1人半扶持であった。
- 36) 前掲『甲府御城付』、p.317。
- 37) それにもかかわらず多くの先行研究は二版のものを嘉永甲府図として紹介している。初版と二版とは記載人名の相違も多く、このことに何ら注意が払われないまま使用されてきたことは、従来の甲府都市史の研究における重大な過失と言わねばならないだろう。
- 38) 本稿では頼生文庫本と若尾資料本を用いた。前者は「弘化二乙巳年改 甲府魚町四丁目 村田屋孝太郎板」との記載がある小型の分限帳で、勤番士・勝手小普請らの姓名と石高、居住地(勤番士のみ)が記される。後者には年月の記載が見えないが、史料に見える小笠原長門守と小田切土佐守の両名が甲府勤番支配であるのは安政3(1856)年4月25日から翌年3月13日までに限られ、この一年間に絞込める。記載事項は基本的に前者と同じ。以下、前者を「弘化便覧」、後者を「安政便覧」とする。
- 39) 赤岡重樹旧蔵史料、山梨県立図書館所蔵。赤岡重樹氏は戦前の郷土史家で、彼による写本が残る。冒頭に「文化十一甲戌之春三月記之」とあり、記される勤番支配名はこの時期と矛盾しない。しかし仮役として挙げられている勤番士名から判断すると、この名鑑は当初文化2(1805)～3年につくられ、同11年時点で部分的に訂正が加えられたものと見るべきだろう。本稿ではあくまで移転時期推測の参考程度に使用するにとどめる。
- 40) 赤岡重樹旧蔵資料、山梨県立図書館所蔵。大正13年に廣瀬廣一氏による写本を昭和16年に赤岡氏が写したものの。「此帳文政中甲府城附同心御普請方付中川為徳所写、蓋府庫所蔵者也」とあるが、記載人名からすると天保初期、また「貼紙」は天保後期のものと見られる。同一敷地を描き、かつ記載内容が異なる図もあることから図の作成年代には数年のずれがあると考えられる。原本の所在が不明なことが惜しまれる史料で、それゆえ無批判に用いることは危険だが、武家屋敷の土地所有の状況を最も詳しく示してくれる史料であることから、慎重を期した上で使用したい。
- 41) 前掲「仮絵図帳」。
- 42) このような論理は当初から潜在しており、『裏見寒話』にも「増山町は御城へ拾四・五町を隔る。夫故当所にて拝領の勤士は(享保10年に)悉く郭内(ママ)納戸小路へ移る」(pp.26-27)との一節が見える。
- 43) なお、これらの移動が甲府勤番士自身の意向を反映したものであることは、「甲府勤番日記」などの史料に屋敷替願の記事が散見される(p.1105など)ことから明らかと言ってよいだろう。
- 44) 『萬代日記』、若尾資料、山梨県立図書館所蔵。
- 45) もっとも、大河内が当初29番屋敷を拝領していた事実から考えると、史料③における「是」の対象は、鈴木のみならず湯川も含む、或いは鈴木としたの誤りで実際は湯川であった、と考える方が自然なようにも思われるが、これ以上の判断材料がないため性急な結論は控えたい。
- 46) 安藤正人「近世甲府の都市構造と役負担」(『史料館研究紀要』第13号、1981年9月)、p.214。
- 47) 安藤前掲論文、p.141。
- 48) 「富田富五郎墓銘」(教育資料人物部、『甲府市史』史料編第4巻 近世Ⅲ、pp.301-302)。
- 49) 『御用日記』(坂田家文書)参照。
- 50) 内山勘「甲府徴典館」(『甲府市史』史料編第4巻 近世Ⅲ 所収)、p.268。
- 51) 前掲『甲府徴典館』、p.267。
- 52) 宮本定正『甲斐廻手振』(嘉永3(1850)年序、若尾資料)。
- 53) 前掲『甲府徴典館』、p.269。
- 54) 前掲『萬代日記』寛政9(1797)年6月条にも既に「此度郭内追手小路於医学所、米十一日より十人迄は不絶施薬療治致し候替二候間、内治・外治・針治ととり療治受度ものハ三・八之日朝五ッ時より四ッ時迄之内可罷出旨可相触事」との記事が見える。

(2003年5月8日原稿受理、2003年8月21日採用決定)